

南蛮風俗の伝播形態

中山千代

一

一五四三(天文一二)年にポルトガル船が種子島に漂着した後、わが国に渡来してヨーロッパ文明を伝えたのは、ポルトガル貿易商人とイエズス会宣教師であった。ポルトガル国王及びローマ教皇から宗教者と商人以外の日本渡航は禁止されていたので、渡日ポルトガル人はこの両者だけである。彼等とヨーロッパの物資をポルトガル船が舶載して来たのである。彼等ポルトガル人を当時の人々は、天竺人又は南蛮人と呼んでいた。南蛮とは、中国が自分の国を中華、周囲の夷狄を東夷・西戎・南蛮・北狄と称した語で、わが国では平安中期から、南方諸国を指した南蛮の使用例が見られる。ポルトガル人はヨーロッパから南方を経由して渡来したので、天竺(印度)人・南蛮人と云われ、南蛮は、十六・七世紀の日本と交通したポルトガル・スペインなどの南欧諸国を指す名称となった。

経済的發展を未知の国の開拓に求める大航海時代に、東インド航路を開いてインド及び南洋諸島の商業権を獲得したポルトガルは、十六

世紀初頭に北上して中国に進出した。しかし当時の明は朝貢船以外の外国貿易を厳禁していたので、ポルトガル船は密貿易にたよらねばならなかった。そして取締りのゆるやかな福建・浙江沿岸に来航し、一五四〇年代の根拠地は寧波海上にあるリャンポー Liampo であった。ポルトガル船は日本発見以後、リャンポーからわが国に航行するのである。しかし明政府の取締りが当地に強化され、四八(天文一七)年にリャンポーを追われてサンシャン(上川)島へ、さらにランパカウ Lampacau へと移動した。その折、明政府の倭寇鎮圧のため日中貿易が中断し、ポルトガル船が日中仲継貿易を一手に握ることができた。この成功をおさめたポルトガルはカピタン・モールを派遣して、従来この個人貿易を王室直営に改めた。植民政策に功労のある貴族の中から王が任命する甲比丹モールは、ポルトガル船の司令官であつて、貿易の利潤の半分を王室に納めた。五四(天文二三)年に甲比丹モール・レオネル・デ・ソーザ Leonel de Sousa が海道副使汪柏から中国貿易の公許を得た。五七(弘治三)年には中国官憲の依頼でマカオの海賊を掃蕩し、当地の居住権を与えられた。これから後、マカオがポル

トガルの中国及び日本貿易の根拠地となる。甲比丹モールはマカオの行政・司法権を与えられ、貿易を強化したので、対日貿易はなおさかんになった。一方、西まわり世界航路を開いてフィリピン諸島を占領したイスパニヤは、太平洋北部航路によって日本近海に達した。しかしポルトガル国王とイスパニヤ国王とは、ポルトガルは日本諸島、イスパニヤはフィリピン諸島の領域をこえない協定を結び、イスパニヤは日本渡航を避けていたので、十六世紀の日本貿易はポルトガルの独占するところであった。

リスボンを出発したポルトガル帆船は大西洋を南下して喜望峰をまわり、インドのゴアに着く。ゴアで季節風を待って出帆し、コチン、マラッカを経て南支の根拠地マカオに入港する。マカオと日本の間も季節風にたよらなければならない。風に乗って北上して九州に着く。後の天正遣欧使節が二年六カ月をかけて往った道である。季節風を待ちながらの航行には年月を要した。そのうえ暴風雨、暑熱、海賊の難などが次々と襲う困難な旅である。信長や秀吉が、ポルトガルは強国であるが、遠方から日本を征服するほどの兵を送る事ができないので、恐れる事はない(註1)と云ったほど、遙かな国である。九州に達したポルトガル船は、西岸では薩摩の鹿児島、山川、坊の津、京泊、阿久根、天草の志岐、有馬の口の津、肥前平戸、筑前博多、東岸では豊後の日出、府内、佐賀関などに入港した。九州最大の貿易港平戸が最も良港で、ポルトガル船の入港が多かった。しかし平戸では仏教徒の反對が強く、領主は教会を閉鎖して宣教師を追放したので、代りに大村

領の横瀬浦が一五六二(永禄五)年に開かれた。翌年の大村領内乱に横瀬浦は焼失、六五(永禄八)年に同領内福田を開港した。しかし福田港は浅く、碇泊に不適當なため、七〇(元龜一)年、長崎港が開かれた。この地は八〇(天正八)年には大村純忠からイエズス会に寄進され、日葡貿易及びキリスト教の中心地となった。

ポルトガル船入港の状況を見ると、キリスト教布教と密接に結ばれている。貿易船の入港は宣教師の許可を要し、布教を許した領国に限られる。六四(永禄七)年に平戸の近くまで来ていたポルトガル船は、宣教師ルイス・フロイス *Jus Frois* の許可なしには入港しなかった。平戸領主松浦隆信は入港を督促する。しかしポルトガル人は、宣教師を平戸にまねいて今までの排撃行為を陳謝し、教会の建設を認めることを要求したので、止むなく隆信はその条件にしたがった(註2)。入港が布教のかけひきに使われるのであった。フロイスが隆信について「ポルトガル人に期待する利益大なるにあらざれば領内にパードレおよび会堂を置くことを許容せざるべし」(註3)と批判したように、領主側もこの関係を利用して、貿易のために布教を許すのである。貿易の利は戦国大名の領国経済にとって、最も有利な収入源である。経済拡充のための城下町商工業の発展、農村地域の生産向上などは、或期間の経過が必要であるが、ポルトガル船が入港すれば短期間に巨額の利を得ることができるのである。またポルトガル船の舶載するヨーロッパの武器、弾薬、火薬の原料硝石などの軍需品の入手は、領地争奪戦の成否を決定するものであった。熱心にキリスト教を保護し、自らも

キリシタンとなった有馬鎮純、大村純忠、大友義鎮（宗麟）等はポルトガル船の貿易、軍事的利益の享受を、領国経営の基本政策とした大名である。豊後一カ国の大友義鎮が七六（天正四）年には五カ国の領主となって非常な富力を得たように、ポルトガル貿易は成長過程にある領国の支配者に受け入れられたのである。キリスト教布教にセットされたポルトガル船は貿易商品のほか、布教に必要な銀その他の物資、宣教師の祭服、ロザリオ、メダイ、祭壇用具等を運び、宣教師が布教の許可を求めるための贈物を船載した。帰帆時には宣教師の通信を運び、船長自身も布教状況の報告をするのである。

ポルトガル貿易の中心は日本と中国との仲介貿易であるが、南洋諸島及び印度方面の物資と共に、ヨーロッパ品が船載された。ポルトガルの輸入品については、当時の史料の中に見出されない。十七世紀半に書かれた「亜媽港紀略」の「日本長崎ヨリ異国へ渡海湊口マデ船路積」に「天川八百里此所ヲ南蛮人商賣ノタメ舟カ、リ島ヲ借り住宅仕大明ノ物ヲ日本へ賣切又其身ノ國へモ渡シ候日本へ賣來候モノ」と、その品々を列挙するが、ヨーロッパ品については「其外南蛮モノ天笠モノ持來申候」としか記していない。中国品に対して南蛮ものは、問題にならぬほど少量であったようだ。貿易品の取引地については、宣教師ルイス・フロイスが、その著「日本史」の序文に、ポルトガル商人は「日本諸国各地の事情にもほとんど通じていず、大部分の者は彼等の船が入る肥前の諸港のほか何も見ていない」と記し、入港地平戸で取引が行われている。同じ平戸港の状況を「大曲記」には「唐南蛮

ノ珍物八年々満々ト参候京堺ノ商人諸國皆集リ候間西ノ都トソ人ハ申ケル」とあって、港のポルトガル商人の許に、京都・堺はもとより諸国の貿易商人が集まるのである。他の諸港も平戸と同じく、取引は入港地だけで行われた。ポルトガル船は六・七月に到着して、十月或は翌年二・三月の季節風を待つて出帆するので、商人等は少くとも三カ月或は九カ月も滞在する。彼等はかなり期間入港地に留まるわけであるが、貿易についても、その生活についても殆んど書き残していない。種々な事柄を詳細に書き綴った宣教師の記録の中にも、ポルトガル商人の生活風俗についてはあまりふれていないが、フロイスの「日本史」（第四十七章 一五六三年）に、甲比丹モール・ドン・ペロ・ダ・ゲラ Dom Pero da Guerra の所持品が挙げられている。これは宣教師コスメ・デ・トルレス Cosme de Torres が、彼に大村純忠改宗祝の贈物をすすめた時、非常に喜んで所持品を差し出したのである。トランクの中から取り出したものは彼の衣類であって、緋のマント、ビロードの帽子、白いシャツ類、上品なズボン下、新しい帽子などである。そのほか高価な宝石のはまっている金の指輪、頸にかけた金の鎖、金塗りの寝台、琥珀織の掛蒲団、ビロード製の枕、ベンガール絹の寝台掛、ポルトガルの葡萄酒の入っている網をかぶせた大罎、愛玩犬などがあり、財力に富む甲比丹モールの豪華な生活である。

ポルトガル商人の滞在する港町では、領主、住民はもとより、諸国から取引に集まる日本商人との間に、日常的な交渉が行われる。豊後の大友義鎮は入港船の甲比丹モールに招かれて饗応を受け、ポルトガ

ル商人等と談笑する習慣であった。大村純忠に対しても、頻繁な交際が行われている。日葡商人の間では利害上の衝突がある。一五六〇（永禄三）年に平戸で取引の両商人に争が起り、日本人が一把の生糸でポルトガル人の頭を打ち、怒ったポルトガル人は日本人の顔を傷けた。そのため大勢の日本人が激昂し、ポルトガル人を全部殺せと逆襲して大騒ぎになったが、キリシタン達が集まり、ポルトガル人を守って死ぬ覚悟を見せたので事件は鎮まった（註4）。また六三（永禄六）年にはインド木綿の価の事から両国商人が争い、甲比丹モールとポルトガル商人十三人が殺される（註5）など、殺伐な光景の中にも、ポルトガル商人の姿がある。そして港町及び領主の館を中心に行動するポルトガル人の風俗は、その地の人々に親しまれていった。また彼等に関する種々な情報は、取引に集まる商人達によって、その貿易商品と共に各地にも伝わっていったのである。長崎が日葡貿易の中心地になると、司教パードレ・ルイス・セルケイラ Luis Cerqueira の「長崎に対する規定」（註6）に、定住するポルトガル商人のあることが示されている。しかしポルトガル人は婦人を同伴して来ないので、日本女性との結婚が行われた。七三（天正一）年の大村・諫早間の紛争で長崎が攻撃された時、ポルトガル人妻の日本女性が城を抜け出て、城内の様子を信者達に知らせた。また諫早領主の弟深堀純賢が兄を援助して長崎を攻めた時にも、これを迎え撃った信者の妹はポルトガル人の妻であった（註7）。この二つの場面のポルトガル人妻が同一女性か別人かわからず、その結婚生活についても不明であるが、ポルトガル

人と結婚した女性の実例を見る事ができる。この女性についてはポルトガル人の妻と明記されているが、そのほか婢妾生活の結婚も行われていた。それは、ポルトガル商人奴隷売買の側面であった。奴隷売買については秀吉が宣教師追放令公布の前日に、イエズス会副管区長パードレ・ガスバル・コエリユ Gaspar Coelho に送った詰問状四カ条のうち挙げられ、彼を憤激させた問題の一つである。秀吉は八七（天正一五）年の宣教師追放令によってキリスト教を禁止し、長崎をイエズス会から没収して直轄領とするが、代官を派遣して貿易を奨励し、天下統一事業として長崎の発展をはかった。内外人雑居の国際貿易都市の長崎は、ヨーロッパ風俗流入、伝播の中心地であった。

- 註(1) 一五八七年十月十日付、パードレ・アントニオ・プレスチーノ書翰。岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」訳文。以下同じ
- (2) ルイス・フロイス「日本史」第二十五章、東洋文庫版。以下同じ
- (3) 一五六四年十月三日付、パードレ・ルイス・フロイスが平戸よりインドに在る耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」新異国叢書。以下同じ
- (4) 一五六〇年十二月一日付、イルマン・ゴンサロ・フェルナンデスがゴアよりコインブラの耶蘇会のコレジオの某イルマンに贈りし書翰「イエズス会士日本通信」
- (5) ルイス・フロイス「日本史」第四十三章
- (6) Cartas do Japão 岡本良知 前掲書
- (7) 長崎年表、ルイス・フロイス書翰

ポルトガル商人が貿易を入港地でしか行わなかったのに対して、宣教師は布教のため意欲的に足跡を拡げる。フランシスコ・サビエル Francisco Xavier が九百名を改宗させて一五五一（天文二〇）年に去った後、次々と派遣されて来るイエズス会士は、信者数の増加と布教地域の拡大につとめる。七一（元龜二）年のキリシタン総数三万、会堂四〇（註一）、八一（天正九）年には信者十五万、会堂二百となった。十五万人の地域別内訳は豊後一万人、有馬、大村、平戸、天草、五島、志岐等及び四国に十一万五千人、京都を中心の五畿内諸国と山口及びその他の地方に散在する者二万五千人である（註二）。なお同年にフロイスは越前北庄に行き、領主柴田勝家に布教を許された（註三）。イエズス会の教線は九州から越前に延長されて、日本人との接触を拡げていったのである。

一五八四（天正一二）年、マニラからマカオに向うポルトガル船が平戸に入港した。この船はフランシスコ会の宣教師二名とアウグスチノ会宣教師二名を乗せていた。イエズス会以外の諸派の宣教師が渡来した最初である（註四）。また八七（天正一五）年に天草サシノツにスペイン船の初来があった（註五）。フィリッピンのマニラを根拠地とするフランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ会はこれを楔機に、日本伝道を強く希望した。危惧を感じたイエズス会は他派の渡日禁止をはかる。一五八五年一月二十八日付の教皇グレゴリオ十三世の勅書が

下付され、イエズス会以外の日本布教を禁じた。しかし豊臣秀吉とフィリッピンとの外交折衝の際、フィリッピン総督の使者として、九二（文祿二）年にドミニコ会宣教師ファン・コーボ Juan Cobo、翌年にフランシスコ会宣教師ペドロ・バプティスタ Pedro Baptista 一行が来日して、日本伝道が開始される。同会宣教師ジェロニモ・デ・ジエズス Jeronimo de Jesus はスペイン通商を希望する徳川家康に保護され、宣教師服を着て自由に布教することを許された。彼は九八（慶長三）年に、江戸に出て教会を建てた。諸修道会は日本進出のため、ポルトガル王を兼ねたイスパニヤ王フィリップ三世を動かし、一六〇〇年十二月十二日付の教皇クレメント八世の勅書が發布された。ポルトガル領から入国するという制限付ながら、諸派の日本布教が許可され、伝道は活発になった。ドミニコ会は薩摩、アウグスチノ会は豊後を本拠に、フランシスコ会は京都、伏見、江戸から浦河に進出する。イエズス会も他派に劣らず、一六〇七（慶長一二）年に駿河から江戸に行き、また宣教師の行った事のない上野地方も遍歴した（註六）。ついで教皇パウロ五世の一六〇八年六月十一日の勅書が、入国径路の制限を解き、日本布教は全く自由となった。しかし日本は、秀吉・家康と続くキリスト教禁止時代であった。また伊達政宗は一三（慶長一八）年の江戸キリシタン迫害に、殉教を望んだフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロ Luis Sotelo を仙台に伴い、キリスト教はその禁止時代に、奥州にまで教線を伸ばしたのである。

こうしてわが国各地に現われたヨーロッパ人に接触した人々は、ど

のような反応を示したであろうか。サビエルの最初の布教の時、民衆が石を投げ、悪口を浴びせるので、死を覚悟するのであった(註7)。一五六〇(永祿三)年に京都に入ったガスパール・ビレラ Gaspar Vitala 一行に対しても、異様な姿を恐れて、家を貸す者もなかった。ようやく借りた堀立小屋はあまりに狭く、玉倉ノ町に移るが、これもみすぼらしい家であった。ビレラは民衆に関心を持たせるため、古い縫い合わせの掛蒲団を蘆の壁にかけて飾り、紙で作った十字架を結び付けた。彼は古いマントを着て大学を卒業したしるしの赤い帽子を被り、祈祷書と墨筆、紙を載せた小さな台の前に坐る。日本人のイルマン・ロレンソ Fr. Laurengo は大きなロザリオを持って片側に、一方には同宿たちが坐って形を整えた。この珍らしい様子とまだ聞いたこともない教に、大勢の人が押し寄せた。「真先に坐席を取ろうと我も我もと入って来る人々にはそれぞれの理由がある」とフロイスは次の四点を挙げている。一は宣教師が普通の人と違った姿をしていると確信して見に来たにすぎない。二は好奇心からインドやヨーロッパのことや習慣を尋ねに来た。三はこの新しい教を攻撃に、四は宣教師を嘲り辱しめるためである(註8)。始めて見る異邦人への民衆の反応は好奇心と嘲笑であった。ビレラが將軍足利義輝を訪問する時、日本の着物の上にポルトガルの羅紗のできている非常に赤目もあらわなマントを着て、赤い帽子を被り、一冊の本を持ち、ロレンソは黒い木綿の道服を着た。人々がこの姿に驚ろき騒ぐ光景を、フロイスは次のように描いている。「子供たちは往来に出て来て大声にどなったり叫んだりしな

がらばあでれの後について行った。男たちは戸口に立っており、女たちは窓に出ていた」。將軍の居処妙覚寺では召使たちの「ある者はあでれの眼の中に指を入れそうにしたり、ある者は手を拍いて大笑しながら頭をふり、ある者はあでれを一目見て呆れたような様子をし、後から前からはあでれを見るためにその周囲をぐるぐる廻り歩き、ばあでれの周囲に押し寄せた」(註9)。河内のキリシタン、サンチョ(三箇伯耆守頼照)がビレラに始めて会った時の事を「その言葉も、衣裳も、服装も、起居振舞いも、我々が初めのうち見た時は、嘲笑い、嘲り、愚弄するための種を与える以上何の役にもたないほど、我々の目には滑稽だったので(註10)」と回想しているように、嘲笑するばかりであった。異邦人の異様な姿が民衆の嘲笑的好奇心をかりたてるが、一方にはこの異質なもののへの拒否反応が激しい。宗敵の仏教徒からの圧迫も強かった。宣教師の家には悪童が土や馬糞を投げ、夜は大入たちの投石が絶えなかった。四条烏丸の家の周囲の住民が家主の酒屋に不買運動を起したように、宣教師の立ち退きを迫るので、彼等は転々と家を移らねばならなかった。大きな黒いマントを肩にかけた宣教師は「天狗」「狐」と云われ、肉食の習慣から人間を喰うとの悪評もたち、人々は宣教師を殺すか追放する事を望んだ(註11)。このような反応は都だけでなく、宣教師を始めて見る各地に共通の感情であった。六四(永祿七)年に宣教師ジョヴァンニ・バッティスタ Giovanni Battista の豊後からの通信は「我々が人間を食べるといふ説が言いふらされていて、それゆえ、彼等はいつでも我々に対して不快な感じや

毛嫌いをもっています。そのために、我々は街でも道でも悩まされなければなりません。何しろごく小さな子供たちでさえも我々を馬鹿にして、後ろから侮辱するような言葉を叫びます。時々彼等は夜我々に石を投げ、別の時には、気がついてみると、彼等が我々の家を焼き払おうとした火箭が屋根の上にあります」(註12)と述べている。八一(天正九)年のフロイス北国伝道の際、長浜では「予が町の入口に着くや、この地全体が騒ぎ、同伴者の言ふところによれば、三、四千人の後に随ひ或は前を歩いて、大きな声を発し、また我等の服装を嘲笑し、また罵詈する者もあり」(註13)という状況であつて、越前へ入つてからも同様である。布教の歳月を経ても、始めて宣教師に接した地方では、このような初期的反応が示される。

民衆の最初の拒否反応に耐えながら伝道活動に入る宣教師は、まず支配者を訪問して布教許可を得るのである。外来宗教のキリスト教にとって、主権者の布教許可が第一の条件であるが、イルマン・ジョン・フェルナンデス Juan Fernandez の「この国の領主達は皆臣民を遇すること甚だしきがゆえに、臣民は全く領主次第にて」(註14)という見解が示すように、民衆の拒否反応に出会つた宣教師は、上から下への有効な布教手段を選ぶのである。訪問の際には南蛮の珍らしい品々を贈る。サビエルが山口の大内義隆に人々のまだ見たこともない品々を贈つて布教の許可を得たように、贈物は大きな役割を果たした。大内義隆に時計、燧石銃、硝子器、鏡、眼鏡、聖書等、大友義鎮に武器、武器、大村純忠に十字架付金扇、鍍金の寝台、絹の敷布団、掛布団、

天鷲絨の枕、精巧な席、織物、ロザリオ、足利義輝に砂時計、鏡、黒い帽子、麝香、竹、足利義昭に硝子器、絹、孔雀の尾、織田信長に鏡、孔雀の尾、黒天鷲絨の帽子、籐の杖、天鷲絨の椅子、鍍金の燭台、緋天鷲絨、切籠硝子、シャツ、セイラのシロウラ、紅色の上履、金平糖入りの硝子器、蠟燭、紅紙、柴田勝家にオリブの実、豊臣秀吉に糖果、葡萄酒、徳川実康に時計などが贈られている。贈物には印度地方のものもあるが、ヨーロッパの珍奇な品々を支配者たちは喜んだ。フロイスが「彼等が珍重する好き物」と、巡察使アレックスandro・バリニャーノ Alexandoro Valignano に報告したヨーロッパ品は、ポルトガルの帽子に琥珀又は天鷲絨の裏のあるもの、砂時計、硝子器、眼鏡、製革、天鷲絨又はグランの財布、刺繍のある上等の手巾、瓶の金米糖、上等な砂糖漬、蜂蜜、ポルトガルの羅紗のカップ、壺の砂糖菓子、壺の小菓子、フランドルの羅紗、山羊革、毛氈、聖宝匣、珠数、キリスト・聖母・諸聖の画像などである(註15)。信長はバリニャーノから贈られた金の錦を施した天鷲絨の椅子を、天正九年二月二十八日の調馬の行列に加え、彼の前に高く捧げて威勢を示したので、諸国から集まつた見物人に評判となつた(註16)。贈物はヨーロッパ品流入の一ルートであり、上層階級に異国趣味を醸成する。

粗末な服装で伝道を始めたサビエルは投石や悪口に悩まされるが、大内義隆に見せた金欄の祭服姿は、神々の生き写しのようにだと感嘆された(註17)。この経験からであろうか。日本人は外見によつて人を評価すると見ている。その後の宣教師たちも同じ思考に立ち、支配者接

近の布教手段には立派な服装を必要と考え、貴人訪問の服装に威儀を整える。ビレラが將軍義輝を一五六五（永祿八）年の正月祝に訪問した時、彼はシエメロテ Chanalote で作ったロバ Loba、古くはあるがオルムズ製の鍛子を入れた大マント Pulvale を着て帽子 Barrete を被り、同行のフロイスはマント Capa と修道服 Rupa を着用、権威ある人々の用いる撚った絹製の上靴を穿いて輿に乗った（註18）。この豪華な服装についてフロイスは「日本人は外形整えるにあらざれば人を崇敬せざるが故に、パードレは此際平常の如くしては宮廷に入るを許されず。主の栄光とキリシタンの幸福の爲め盛装する必要ありき」（註19）と説明している。宣教師の贅沢な服装は七〇（元亀一）年に来日した布教長フランシスコ・カブラル Francisco Cabral から攻撃され、イエズス会にとつて重要な問題（註20）となるのであるが、布教初期から伝道に従事した宣教師の多くがカブラルの主張に反対したように、フロイスも「この外見の贅沢は異教徒たちがまだ司祭というものの真価やキリシタンの教について何の知識ももっていなかった初期には、少くともキリシタンの信望を高めるための助けとなった」（註21）という弁明を付け加えた。立派な服装と贈物は上層社会に庶民と異なる反応を起させ、それはまた民衆の拒否反応を消滅させるのにも役立ったのである。ビレラの將軍訪問後もなく、義輝は松永久秀らに殺され、織田信長が義輝の弟義昭を擁して、六八（永祿一一）年に入京した。その間堺に滞在して機を待っていたフロイスは、信長の重臣和田惟政の斡旋で、六九（永祿一二）年に信長と將軍義昭を訪問して、布

教の公許を得ることができた。フロイスは信長に厚遇され、その滞京中五回の訪問を行い、種々の贈物を贈っている。信長は岐阜に帰国する前日（永祿十二年四月二十日）、日本の習慣によって、暇請の挨拶に訪れたフロイスに祭服を着用させ、みごとで目もあやな印象を与えると言つてその形をほめた。これはフロイスが將軍義昭を訪問した時に用いたオルムズ製の錦繡のマントと黒頭巾である。まだ一度も見たこともないヨーロッパの鍛子の衣服を見せてほしいと、信長が頼んで持参させたものである。当日は出発前の多忙な夜であったので、フロイスは再び都へ帰る日まで保存しておくと言つたが、信長はその着用を懇望した。外の客室には所用の者が大勢待っているにもかかわらず、信長はゆっくりそれを眺めて感嘆し、贈物の蠟燭をともし、フロイスを引き留めた（註22）。信長がこのように南蛮ものを好んだので、貴人や市民たちは信長の朱印状を得るために南蛮の品々を贈り、ヨーロッパの衣服、緋の合羽、羽飾りのついた天鷲絨の帽子、聖母の像がついた金メダル、コルドバの革製品、時計、きわめて高価な毛皮の外套、たいそう高価なヴェネチヤ製のクリスタルガラス器、鍛子生地などが、多数の大きな櫃にいっぱいつまっていた。フロイスは「このような遠隔の地方のどこからこれほどたくさん品が来るのであろうか。また日本人がそれをどこで買うことができるものかもわからずにいづれ劣らずに驚くばかりであった」（「日本史」八十六章）と述べている。ポルトガル貿易品は信長の所へ、贈物として集まっているのである。信長も南蛮ものを贈物に用い、永祿十三年に「是は四年さき

公方灵陽院(義昭)殿、都へ御供仕り、征夷將軍に備へ奉りたる弓矢に、縁起のよき笠にて候」(「甲陽軍鑑」巻第十一之上品第卅六 従信長「使者音物之事」と握々緋の笠(sombiero)を武田信玄に贈った。これは信長が用いた南蛮笠であるが、「信長公記」巻十四にも、天正九年正月八日、安土城爆竹の行事に、黒い南蛮笠をかぶった事が記されている。戦乱に荒廢した京都の教会堂は改築されて三階建ての壮麗な構えが聳え、安土にも信長から与えられた土地に三階の住院、セミナリオ、聖堂が建ち、信長の南蛮趣味を大いに満足させた。イエズス会にとっても、最盛期であった。信長のキリスト教保護政策は仏教弾圧に対応するものであるが、中世的權威の否定が外来のヨーロッパ文明に心情的に傾斜したのであろう。信長の斃れた後、天下人となった秀吉にも南蛮趣味は継承された。副管区長ガスパル・コエリユ(Caspar Coelho)が一五八六(天正一四)年に大坂城の秀吉を訪問した時、秀吉が自ら案内した天主閣の各層には金銀財宝が満ちていた。その一室に新しい緋の外套が十または十二枚も絹の紐で吊され、立派な織物に金の刺繍をした蒲団の掛けてある非常に高価な寝台が二つあった(註23)。また城中の婦人はキリシタンの聖徒の名で呼ばれているほど南蛮好みである(註24)。九〇(天正一八)年に帰国した遣欧少年使節一行が、翌年一月二十三日に入洛した時、南蛮情緒が都に展開された。一行を引率する巡察師アレッサンドロ・バリニャーノは宣教師追放令に抵触するのを避けて印度副王使節の名目で入京した。外交使節の威儀を強調するため、盛装のポルトガル商人十三名を、使節の従者とし

て一行に加えた。京都の人々はポルトガル商人については、長崎に赴いた貿易商の情報を知るだけであつたので、始めてその姿に接し「口に指をさし入れて」呆然と眺め、その華麗な服装に「天より来れるホトケならん」と驚嘆した(註25)。秀吉の謁見式は三月三日に聚樂第で行われ、ローマ教皇グレゴリオ十三世から贈られた黒天鵝絨に黄金の縁飾りのある衣服を着た四人の使節を接見した。秀吉もポルトガル商人の美装に驚ろき「ヨーロッパの人々に比ぶれば日本人は乞食の如し。然く遠方より来りて尚華やかにして美しき服装をなすとは驚くべきことなり」と云つた事が、フロイスによって伝えられている(註26)。このポルトガル人の華やかな服装の評判が高まり、京都にポルトガル風の流行がおこつた。ポルトガルの衣服や服飾品を持たなければ一人前ではないと考えられ、多くの諸侯はカッパ、頭巾、カミーザ・ダワノ、カルサン、無縁帽子など種々の装身具を集め、信者用の聖宝匣、コントスやロザリオまでも装身具に用いた。フロイスは「かくしてこの『ポルトガル』風は大いに流行したるが、それは蓋し奇異なることなり」(註27)としている。しかし京都では既に宣教師によってその基盤が培われ、京・堺の商人が輸入する貿易品からも、上層社会の異国趣味は横溢していた。しかも京都の人々にはこの時始めてポルトガル商人の盛装を実見し、その美しさに魅せられたのが刺激点となつて、このような流行現象をおこしたのである。その後秀吉は朝鮮出兵のため、肥前名護屋城を築いて出陣した。秀吉は天正二十年四月から翌年八月までここに滞在する。名護屋は長崎に近く、ポルトガル船甲比丹の来訪

があり、諸侯は長崎を訪れた。この往來の間にポルトガル風はますます流行した。諸侯はポルトガル人から衣服を買い求め、または長崎で作らせ、ロザリオ、聖宝匣などを頸にかけた。フロイスの報告によると「太閤様が〔大政所の病気を省するため〕名護屋よりミヤコに赴きたるとき、名護屋〔にある〕諸士及びその宮臣は我國の風俗をなして太閤に随ひミヤコへ行きたり、長崎の裁縫師は皆閑暇なく多忙にして、

これまたミヤコに随伴せり。現今彼等の間に琥珀球、金の鎖、ボタン等も流行す。我等の食物は彼等の大いに嗜好するところなり。現今まで日本人の甚だ嫌悪せし鶏卵・牛肉の食品は殊に然り。太閤様自身これ等の食物を甚だ嗜好するに至れり。ポルトガル人の種々の物品の彼等の間に名声を有するは大いに驚嘆すべし」とある。秀吉と秀次がポルトガル服を着用したことを他の宣教師たちも記しており、一五九四（文祿三）年のニェッキ・オルガンチニ *Gnecci Organini* の書翰

には「国王・新関白はポルトガル人の服を着ているので、それが日本人であるか、ポルトガル人であるかを見分けることができない」と述べている。日本の史料では、秀吉、秀次のポルトガル服着用についていないが、諸侯間に合羽や南蛮笠等の贈答が行われている。文祿三年六月二十八日に秀吉の催した変装の茶会に「出立はあらまほしき広袖のゆかた、繻子のかるさん、南蛮頭巾をかぶつて」（小瀬甫庵「太閤記」巻十五）という茶屋の亭主に扮した者の着用例が見られるが、仮装という特殊な場合である。現代に伝わる遺品には、南蛮具足、南蛮鞍、鉄砲、南蛮笠、ギヤマン、時計、うんすんカルタ、ローマ字印章、地

球儀、教会暦、ロザリオ、十字架、メダイ、法衣、幡、指輪、南蛮模様器物、織物、絵画、彫刻、出版物等があり、当時の流行を示している。それはまた南蛮屏風、洛中洛外図屏風、その他の風俗図屏風に描出された世界である。豊国祭図屏風の中に仮装南蛮人が描かれているが、これは祭に踊り狂う民衆の姿である。歌舞伎草子には女歌舞伎が十字架を下げて舞台で踊り、四条河原図屏風に描く犬に輪をくぐらせる香具師は南蛮服装である。南蛮趣味は上層武家階級から庶民層へ拡大されているのである。その伝播は上から下への垂直形態である。しかしこれは首都京都での伝播形態であって、長崎ではポルトガル人及びキリシタンの周辺から外延的に拡大する水平形態である。南蛮様流行は、外来風俗の流入港である長崎と首都京都との二つの核をもち、その各々の伝播形態は異っていた。それは両都市の性格が違うからである。

註(1) 一五七二年二月四日付、日本よりの帰途、パードレ・ガスバル・ピ

レラがコチンよりポルトガル船に在る耶蘇会のパードレおよびイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」

(2) 一五八二年二月十五日付、長崎発、パードレ・ガスバル・クエリヨよりイエズス会総長に贈りたるもの「イエズス会日本年報」新異国叢書 以下同じ

(3) 一五八一年五月十九日付、北庄発、パードレ・ルイス・フロイスより日本在留の他のパードレに贈りし書翰「イエズス会日本年報」

(4) 一五八四年九月十七日付、松浦法印よりフィリップピン総督宛書翰 村上直次郎「貿易史上の平戸」附録

(5) 一五八八年三月一日媽港発、フライ・フランシスコ・マンリッケよりイスパニヤ国王宛の書翰 岡本良知「十六世紀日欧交通史の研

- 「究」
- (6) レオ・パジェス「日本切支丹宗教史」
- (7) 一五五八年一月十日付、パードレ・メストレ・ベルシヨール・ヌネ
スがコチンよりポルトガルの耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰「イエ
ズ会士日本通信」
- (8) ルイス・フロイス「日本史」第二十四章
- (9) 同上書 第二十五章
- (10) 同上書 第七十九章
- (11) 同上書 第二十九章
- (12) 同上書 第五十三章
- (13) 一五八一年五月十九日付、北庄発、パードレ・ルイス・フロイスよ
り日本在留の他のパードレに贈りし書翰「イエズス会日本年報」
- (14) 一五六五年九月二十三日付、平戸よりシナおよびインドに在るパ
ードレおよびイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」
- (15) 一五七七年八月十日付、パードレ・ルイス・フロイスよりピシタド
ールのパードレ・アレッサンドロ・バリニャーノに贈りし書翰
村上直次郎「耶蘇会士通信」
- (16) 一五八二年二月十五日付、長崎発、パードレ・ガスバル・クエリヨ
よりイエズス会総会長に贈りたるもの「イエズス会日本年報」
- (17) ルイス・フロイス「日本史」第五章
- (18) 同上書 第五十七章
- (19) 一五六五年三月六日附、都発、パードレ・ルイス・フロイスよりパ
ードレ・フランシスコ・ペレス及びイルマン等に贈りし書翰
- (20) 松田毅一「近世初期日本関係 南蛮史料の研究」
- (21) ルイス・フロイス「日本史」第五十七章
- (22) 同上書 第八十七章
- (23) 一五八六年十月十七日付、下関発、パードレ・ルイス・フロイスよ
りインド管区長、パードレ・アレッサンドロ・バリニャーノに贈りたる
もの「イエズス会年報」

- (24) 一五八四年九月三日付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスより
イエズス会総会長に贈りたるもの「イエズス会日本年報」
- (25) Frois, Apparatos. 岡本良知「十六世紀日欧交通史の研究」
- (26) 同上書
- (27) 同上書

三

南蛮風俗は長崎と京都に流行世界を現出したが、着用の面でこれら
と本質的に異なる宗教服がある。時代を経るに随って、これにも流行的
要素が加わるが、信者以外の層を含まない純粹性をもつ。十字架・ロ
ザリオ・メダイは宗具としてキリスト教伝来当初から身につけられ
た。キリシタンとなった人々の渴望する装身具であった。宗教服は九
州地方のキリシタンが、かなり早い時期から着用している。一五五三
年九月二十七日(天文二十二年九月一日)、山口のキリシタン・アンブロシヨの葬
儀に、同宿ベルシヨールは白衣を着し、十字架上のキリストの像を捧
げて宣教師の後に随った(註1)。五七年四月十一日(弘治三年三月十三日)からの
豊後府内の聖週、復活祭後の行列に、二人のキリシタンは白衣を着て
蠟燭を持って行進した(註2)。六一年四月三日(永祿四年三月十九日)府内の教会
の聖週、木曜日のデシピリナを行ったキリシタンは、黒服を着け、顔
を覆ひ、荆の冠をつけた。夜のキリスト像を持つ行進には皆白衣を着
け、復活祭には玄義の絵を持つ少年等が白衣を着て、薔薇その他の冠
をかぶった(註3)。六二(永祿五)年に、豊後国王大友義鎮を府内の
住院に饗応した時、食事の間ビオラ Viola darco を奏したキリシタン

少年等は、皆白服を着ていた(註4)。以後これと同じように聖週復活祭、葬儀の白衣・鞭打の黒衣・少年奏楽隊の白衣などの祭服着用が拡まる。長崎キリシタン迫害時代にまでなると、信者は皆宗教服を着用している。一六一四(慶長一九)年五月十九日の迫害への抗議デモ、聖体行列に男子三千人、婦人二千人が参加した。パードレ、イルマン、同宿は、短白衣 *sobrepeliz*、ストラ *estola*、カパ *capa* の聖服を着用し、信者は紅色の服、児童は紫の衣裳に短白衣で小天使のいでたち、婦人は白帷子にベロ *velo* をかぶった(註5)。このような儀礼服のほか、個人的な服飾変革もあらわれる。堺の日比屋了珪デイオゴの弟ビセンテは十三才の時洗礼を受けた。豊後の宣教師を訪問する時、少年はイエズス会の習慣をすべて身に付けようとして、頭髪を刈り、絹の着物を全部脱ぎすて、現世を賤しむべき事を説いた。この事を記録したフロイスは、頭髪を刈ったのは日本人が払い得る最大の犠牲の一つであると記している(「日本史」第三十五章 一五六二〔永祿五〕年)。宗教的感動に支えられる大決断も行われるようになったのである。またキリシタン武士も、その宗教精神を表示する服装を用いる。キリシタン大名大村純忠、ドン・バルトロメウの肩衣には、キリシタン・デザインが施されていた。肩衣の両肩の紋は白い地球の形で、その中央に緑色の *Jesus* の字を置き、その文字の真中から、罪標の文字 *J (esus) N (azareno) R (ei) J (udia) H (udaea)* 人の王ナザレのイエズスIIがついた一本の十字架が真直に立ち、地球の周囲の白無地には三本の釘がよい位置に美しく配置されていた。背中には肩の紋と同

じ形の *Jesus* が繡でつけられていた。頸にはロザリオと、立派な金の十字架を懸けている。これは六三(永祿六)年にイルマン・ルイス・デ・アルメイダ *Luis de Almeida* が訪問した時の純忠の服装である。アルメイダの印象は「この君ほどキリシタンであることに誇もっている人を見たことがなかった」(フロイス「日本史」第四十六章(註6))というもので、キリシタン・デザインは最上の効果をあげている。秀吉が根来攻めの時、部将ジョウチン隆佐(小西行長の父)は、白緞子の着物の上に、緋絹に金の刺繡をした短い上着を着て、ピロッド裏の猩々緋の帽子を被っていた。キリシタン武士であるため、南蛮服を誇高く着用したのであろう(註7)。七八(天正六)年に土持領に出発した大友宗麟の船には、白緞子に赤い十字架を付け、金繡を施した旗を懸し、武士たちはロザリオと影像を胸にかけている(註8)。武将の十字架の旗、胸の聖宝は護身の効力があると信じられた。南蛮の装いは武士にとって特別な意味が加わり、キリシタン武士に拡まったのである。

異様なヨーロッパ人に出合って嘲笑した人々も、年月の経過につれてその姿を見なれてくる。そしてキリスト教に改宗した者と、主として仏教的立場からの排耶グループとの二極に分化し、最大多数の中間層もだんだんと南蛮風俗になじんでいった。宣教師は支配階層に贈物を携えて積極的に接近したが、貧民には慈善事業を行って浸透をはかった。病院・癩院・貧民院を設け、捨児を育て、災害時には貧民を救済する。殊に病院でのヨーロッパ外科医療には、諸国から治療を受け

に来る人々があふれた。貧困層は慈善施設の中で、ヨーロッパ文明にふれていくのである。処々に十字架が立ち、教会・住院の日々の活動がある。宗教服着用の四旬節・復活祭・降誕祭・鞭打ちなどの聖行列は、戸外でのデモストレーションでもあった。多数の見物人があり、そのムードに魅せられて行列に参加する者もある。公開される宗教演劇には多数の観衆が集まる。一五六九（永禄一二）年の大村の降誕祭演劇には、キリシタン及びその他の人々が二千人にも及んだ（註9）。

またキリシタン葬儀の厳粛な行列は、改宗の動機になるほど人々に強い印象を与えた。宣教師は日本語が話せるようになり、聖教書も和訳されるので、精神的な理解が進む。コレジオ・セミナリオでは神学・哲学・数学・地理学・天文学等の諸科学、美術工芸品の製作、楽器吹奏などの教育が行われ、ヨーロッパの学芸が教会の外の世界に与える影響も大きい。キリシタンの子弟教育が普及し、豊後の聖堂では八三（天正一一）年に、学習に来る少年は百名を超えていた（註10）。一六〇二（慶長七）年の長崎附近では、子供たちまでキリシタンの教を口誦み、異教徒さえそれに親しんだという（註11）。各地の信者数の増加は南蛮風俗の拡がりを示すものであるが、彼等の宗教生活に接する周囲の人々にも同心円的な波及現象があらわれる。これは長崎でのポルトガル人を中心とする、外延への拡大形態と同様である。

一五五九（永禄二）年にビレラが比叡山に行き、座主への訪問を望んだ時、僧のシキナイはサビエルが山口の王に多大の珍品を贈ったことを挙げて、それに劣らぬ贈物を要求した（註12）。贈物情報は山口か

ら比叡山に伝わり、八年後にまだ記憶されている。またビレラが入京し、ヨーロッパ人が始めて京に住みついた評判は、坂東の足利学校にまで伝わった（註13）。信長の前で行われた法華僧日乗との宗論に宣教師側が勝った事件についても、民衆の噂話となって忽ち拡がるのである（註14）。これら宣教師関係の情報は、各地の貿易商人から流れる情報と共に放射線形態をなして、信者及び長崎のポルトガル人周辺の同心円形態に重なる。この横の水平形態はさらに、流行の上下垂直形態と交叉するのである。

（註1） 一五五五年九月二十日付、イルマン・ドワルテ・ダ・シルバが豊後よりインドの耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」

（2） 一五五七年十月二十八日付、パードレ・ガスバル・ビレラが平戸よりインドおよびヨーロッパの耶蘇会のパードレおよびイルマン等に贈りし書翰 同上書

（3） 一五六一年十月八日付、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが豊後より耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰

（4） 一五六二年十月二十五日付、イルマン・ルイス・ダルメイダが横瀬浦より耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰

（5） パテレン・ベルナルデイー・デ・アヴィラの書留 古賀十二郎「長崎市史風俗編」

（6） 一五六三年十一月十四日付、パードレ・ルイス・フロイスが大村よりヨーロッパに在るイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」にも記されている。

（7） 一五八五年十月一日付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスよりイエズス会総長に贈りし書翰の数節「イエズス会日本年報」

（8） 一五七八年九月三十日付、パードレ・ルイス・フロイスが臼杵より

耶蘇会の某、パードレに贈りし書翰「イエズス会士日本通信」

(9) 一五六九年八月十五日付、その名知られざる一ポルトガル人が日本よりポルトガルの耶蘇会のパードレおよびイルマン等に贈りし書翰

「イエズス会日本年報」

(10) 一五八三年一月二日付、パードレ・ルイス・フロイスよりイエズス会総長に贈りたるもの「イエズス会日本年報」

(11) レオン・パジェス「日本切支丹宗門史」

(12) ルイス・フロイス「日本史」第二十三章

(13) 同上書 第二十五章

(14) 同上書 第八十七・八十八章

四

南蛮文化交流の初期的状況から外延的に波及していく現象は、外来文化伝播のパターンである。ことに水平的コミュニケーションに流行の垂直形態が交叉するのは、階級社会特有の形態である。階級社会では上層階級のホスピタリティーが、まず外来文化を心情的に容易に受け入れさせる。さらに政治的・経済的に外来文化受容の能力を持っているのも、上層階級である。この上層社会の受け入れた文化が階層的に下降して一般に拡まるのである。しかしこのような外来文化伝播のパターンを形成する個々の事例は、流入する外来文化の性格と、外来文化を取りこんでいくその時代の特殊性によって、それぞれ異った様相を示すのである。高度な大陸文化を渴仰的に受容した古代、蒸気船が開発されて距離の縮まった欧米諸国の外圧によって、近代文化が激しく流入した幕末・明治と異なり、南蛮文化は帆船交通の遙かなポルト

ガルから貿易商人とキリスト教宣教師がもたらしたものである。帆船交通の困難な海を距てたわが国へは、東南アジアで行われたヨーロッパの武力征服が及ばず、平和な貿易関係を保つことができた。ポルトガル船の司令官甲比丹モールは、日本へは商人頭としてきらびやかな衣裳をまとって渡来するのである。このような貿易・商業ルートから輸入されたヨーロッパ文化に対して、上層社会の異国趣味的傾倒となつたのである。宣教師の活動によって、キリスト教団内部に外来宗教とそれに伴う風俗とが宗教的に浸透していても、信仰に関係のない外縁社会では、やはり南蛮趣味を誘発するものであった。ポルトガル人はただ港の商業人であり、宣教師もまたキリスト教という制約の中にあつた。遙かな国からの文化伝播者がこの両者に限られたため、古代や近代の外来文化のように、既存文化を変革させるほどの力を持たなかつた。領国大名制から幕藩体制の統一政権に進むわが国にとつて、体制的イデオロギーのない外来文明は異国趣味として受け取られたのである。早くからヨーロッパの鉄砲を採り入れて天下を制覇し、キリスト教の布教を許可した信長は、外来文化摂取のリーダーであつた。二条城築城の際にも工事に従事する武士数万人に、機能的な軽袴、カバヤを着用させて(註1)、南蛮趣味を超えた進歩的な行動が見られるが、彼の世は九年間であまりにも短かく、それ以上の展開がなかくして終つた。秀吉の治世は「さるほどに、太閤秀吉御出世より此かた、日本国々に金銀山野にわきいで、そのうへ、高麗、琉球、南蛮の綾羅、錦繡金襴、錦紗、ありとあらゆる唐土、天笠の名物、われも

く、珍奇のその数をつくし、上覧にそなへたてまつり、まことに宝の山をつむに以たり」(「太閤さま軍記のうち」と佑筆太田牛一の記したように重商主義で、より異国趣味的であった。その治世も僅か十六年で、南蛮趣味以上の発展は見られない。幕藩体制を確立した江戸幕府は反封建性のキリスト教を厳禁して宣教師を追放し、ポルトガル船の来航も禁じて鎖国したので、南蛮文化の伝播は全く遮断されたのである。

一般的に、キリスト教中心に展開した南蛮文化は、江戸幕府の禁教鎖国によって埋没したと考えられている。しかし数々のポルトガル語が日本語に転化して、今日まで残存しているのは著しい現象である。

これがどのような基盤をもっているかの前提として、南蛮風俗の伝播形態を考慮する必要がある。転化語は織物・衣服・服飾品・食料品などの生活用品の各種にわたっているが、特に衣服は江戸時代を通じてわが国の服装に採り入れられた。合羽 *capa*、襦袢 *shirao*、軽袴 *calçao* 莫大小 *meias* などは、南蛮服がポルトガル語から転化した名称のまま、日本の衣服になっているのである。合羽は坊主合羽、引廻し、長合羽、短合羽などがあり、高価な舶載羅紗の代りに木綿や油紙からも作られ、旅行用、防寒用に広く用いられた。半ズボン型の軽袴は香具師、髮結、下男等忙がしく働らく者の活動的な労働着である。襦袢は和服の肌着であり、ポルトガル語の靴下である莫大小は足袋、手覆、股引をも併せて呼ぶようになった。これらはすべて民衆の服装である。南蛮服の民衆社会への伝播は、農民貧困層のキリシタンが多い九

州地方に顕著であるが、宣教師が災害時の救恤用として貧民に与えていることも見逃せない。永禄七年の九州度島の火災に貧人救済用衣類として、ズボン下 *tangas*、マント *mantos*、シャツ衣類 *camisas* 等が記録されている(註2)。南蛮服の民衆社会への伝播は宣教師および信者、ポルトガル商人を核とする同心円的水平形態の範疇であり、秀吉時代の南蛮風流行の垂直形態の下降圏内にはいる。上層社会に流行した南蛮風俗が江戸幕府の鎖国以後払拭されてしまったのに対して、民衆社会伝播の南蛮服はその生活の中に、和服の欠点を補なう服装となつて、完全に日本化された。近世の民衆文化には町衆・町人層の華麗な小袖が代表的地位を占めているが、なおその下層の労働階層に機能的な民衆衣服が創造されたことを、南蛮風俗伝播形態の中にとらえることができるのである。

註(1) 一五六九年六月一日附、都発、バードレ・ルイス・フロイスよりバードレ・ベルシオール・デ・フィゲイレドに贈りし書翰、「耶蘇会士日本通信」

(2) 一五六四年十月三日付、バードレ・ルイス・フロイスが平戸よりインドに在る耶蘇会のイルマン等に贈りし書翰「イエズス会士日本通信」(一般教育講師)